

CAMD 報告会

(Center for Development of Advanced Medicine for Dementia)

アルツハイマー病根本治療薬の開発を目指して

治療薬探索研究部

河合 昭好 部長

平成30年11月8日(木) 16時00分～

第1研究棟2階大会議室

人口の高齢化に伴い、認知症患者は増加の一途を辿り、大きな社会問題となっている。中でも患者数の最も多いアルツハイマー病（AD）には根治薬が存在せず一日も早い開発が望まれている。これまで製薬会社を始め多くの研究者がその開発に多大の努力を傾けてきたにもかかわらず、未だ有用性が認められた薬剤はなく、有望視された薬剤が相次いで臨床試験で脱落しているのが現状である。

長寿研では AD 病態に基づく創薬標的に関する基礎研究が活発に行われており、当研究部では同定及び検証された標的に対する創薬を実施し製薬企業等へのライセンスを通して実用化を目指している。現在創薬ステージの異なる 3 つのプロジェクトに携わっており、最も進んだプロジェクトは A β の異常重合の開始点として働く病的産物である GAB（ganglioside-bound A β ）を標的とする先制治療薬 ASIM（Anti-seed internal medicine）の研究である。1日1回経口で服用すれば発症を遅らせることのできる低分子化合物の開発を目指して探索を進め、アドバンストリードを同定した。また ASIM に続くプロジェクトとして、タウオリゴマーによって誘導されるシナプス毒性を消去可能な化合物の探索研究にも着手した。現在シナプス毒性発現の分子レベルでのメカニズムに基づき、全てのモダリティの可能性を追求すべくスクリーニング法の開発に取り掛かっている。3番目のプロジェクトは最近注目を集めている脳内炎症であり、ミクログリアの活動を適切に調節することにより脳内炎症をコントロールできる化合物の同定を目指して研究を開始した。

本報告会ではこれら3つのプロジェクトの進捗と今後の計画を中心に紹介したい。